ZOCALO 2023 8 ▸ 9

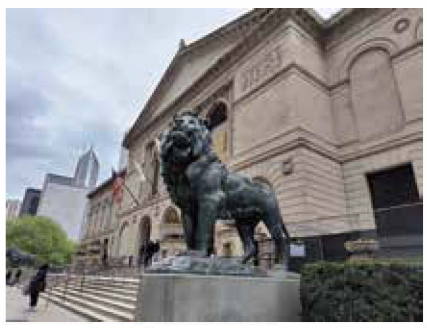
ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

収蔵品、海を渡る—シカゴ美術館への作品貸出クーリエ報告

ポール・シニャック《アニエールの河岸》1885年

アメリカのシカゴ美術館で開催している展覧会「ファン・ゴッホと前衛—近代の風景」(2023年5月14日〜9月4日)に、当館の収蔵品であるポール・シニャック《アニエールの河岸》(1885年)が出品されています。本作は、シニャックが印象主義から新印象主義へと移行していく時期に描かれた貴重な作品で、2018年度に当館が購入し、コレクションに仲間入りしました。貸出先のシカゴ美術館は、アメリカ屈指の大規模美術館であり、新印象主義を代表する名作ジョルジュ・スーラ《グランド・ジャット島の日曜日の午後》が収蔵されていることで知られています。《グランド・ジャット島—》は「最後の印象派展」となった第8回印象派展(1886年)に出品され、当時の芸術家や批評家たちに大きな影響を与えました。実は、その第8回印象派展には、《アニエールの河岸》も出品されていたのです。展示場所は異なりますが、実に100年以上の歳月を経て、2作品がシカゴ美術館内で再会を果たしました。

海外への貸出の際は、作品の安全な輸送や会場での開梱・展示作業を監督するため、所蔵館の学芸員が作品に随行するのが原則です。「クーリエ」と呼ばれるこの仕事は、2020年以降、世界的なコロナウイルス感染拡大の影響で実現できていませんでしたが、ここ最近の規制緩和の動きに伴い、今回の貸出より再開し、貸出担当学芸員がシカゴへ飛びました。本稿では、そのクーリエ業務について時系列に沿ってご報告します。


シカゴ美術館のシンボルである
エントランスのライオン像(筆者撮影)

■2023年4月22日(土)

早朝、事前搬入していた作品を羽田空港に運ぶため、都内の倉庫へ向かいました。トラックにクレート(作品を入れた木箱)を載せ、担当学芸員も同乗して空港へ。空港に着くと、飛行機に搭載するためパレットへの積み付けを行います。このとき、クレートが安全に積まれているか直接確認するとともに、パレットの番号を忘れずに記録します。積み付けが終わると、飛行機への搭載作業になりますが、こちらは直接立ち会うことができないため、空港の上階から該当の飛行機を探し、積み込みの様子を確認しました。その後、作品と同じ便に乗り込み、いよいよシカゴへ出発です。

午前9時30分頃(現地時間)、シカゴ・オヘア空港に到着。出口付近で現地の美術品輸送担当の方が出迎えてくれました。クレートも無事に到着していることを確認し、トラックに積み直すと、すぐにシカゴ美術館へ。美術館に着くと、今回出品する展覧会の担当学芸員ジョイス・ペンさんにご挨拶し、さっそくクレートを展示室へ運び込みます。海外貸出の場合、現地の気候や環境に作品を慣れさせる必要があるため、搬入してすぐには開梱せず、1日〜2日程度置いておくことになります(シーズニングと呼ばれます)。作品が安全に設置されたのを見届け、この日の業務は終了しました。

4月22日、クレート搬入時の様子(筆者撮影)

■2023年4月25日(火)

2日間のシーズニング期間を経て、いよいよ展示作業です。展覧会のコンセプトに合わせて、会場には水辺や自然風景を思わせる美しいミントグリーンの壁が建て込まれていました。まずは、現地の美術品取扱専門業者がクレートを開梱していく様子を注意深く見守ります。作品が取り出されたら、次は現地の修復士とともにコンディションチェックを行います。長距離の輸送により絵具が剥落していないか、新しい傷が増えていないかなど、日本で事前に準備した調書と照らし合わせながら慎重に見ていきます。輸出前と変化がないことを確認し、ホッと胸をなでおろしました。続いて、壁への吊り下げ作業です。担当者と手順を共有したのち、危険がないよう作業員の動きを近くで見守ります。時間をかけて丁寧に作業していただき、無事に作品がきれいに飾られました。これで、クーリエとしての業務は終了です。帰り際、シカゴ美術館の皆さんが「貴重な作品を出品してくれてありがとう」と何度もお礼を言ってくださいました。

4月25日、展示作業の様子(筆者撮影)

海外への作品貸出は、クーリエ業務を含め、困難を伴う部分もありますが、収蔵品を国外の方にも見ていただけるのは非常に嬉しいことです。また、海外の学芸員と交流し、情報交換をすることで、収蔵品を新たな視点からとらえ直したり、今後の調査・研究に役立てられたりといった可能性も広がっていきます。このクーリエ業務を通して、海外貸出の意義と面白さを再認識することができたように思います。

なお、《アニエールの河岸》は、シカゴ美術館での展示を終えたあと、当館の常設展に出品予定です(10月以降を予定)。美術館にとって我が子のような存在である収蔵品の帰りを、楽しみにしていただければ幸いです。(S.A.)

ミントグリーンの壁が美しい展示室(筆者撮影)

特集:須田剋太

MOMASコレクション
2023年9月2日(土)〜11月26日(日)

MOMASコレクションにたびたび登場する須田剋太の作品ですが、まとまって展示するのは8年ぶり。心待ちにしていたファンの方も多いことでしょう。西宮市にあったアトリエでは、具象画を描く部屋と抽象画を描く部屋が分かれていて、その二つを行き来しながら制作していたそうですが、その画家がおかっぱ頭のヘアスタイルで、どこへ出かけるにもデニムのオーバーオールを愛用し、縄文の精神や道元の思想に傾倒して作り上げた独自の造形論を熱く語るのです。1990年に他界したのちも、力強い作品のみならず、剋太はその独特のふるまいや語り口で熱狂的な支持を集めています。

須田剋太は1906年に埼玉県吹上村(現在の鴻巣市)に生まれ、画家を志して20歳から浦和に住みました。旧制熊谷中学校の美術教師・大久保喜一や、浦和在住で光風会の重鎮であった寺内萬治郎が、その個性を尊重しつつ剋太を導き、やがて文展で入選を重ねるまでになります。しかし1941年に京都や奈良に移り住んで以来、長谷川三郎や前衛書家たち、「ゲンビ」(現代美術懇談会)など活気あふれる関西の表現者たちとの交流を糧としながら、自らの制作について深く模索するようになります。

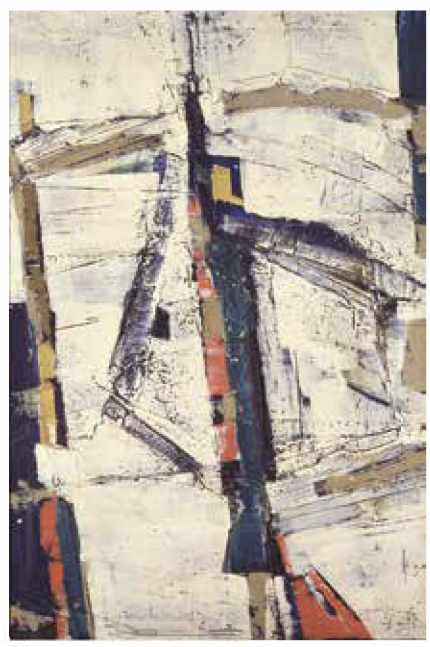
《否定的絶対無》1959年　第33回国展

その結果、1950年代前半には描写を捨てて抽象へと転じ、気迫のこもったストロークの痕跡や、物質性を押し出した豊かなマチエールにこだわった作品を国画会や国際展で発表していきます。ときにはドンゴロスを縫い合わせたり、石や砂を媒材に混ぜ合わせたり、コラージュを取り込むなど、さまざまな素材や技法と格闘しながら大胆な表現を推し進めていきました。その一方で勧める人があり、1971年に週刊誌で連載が始まった司馬遼太郎『街道をゆく』の挿絵を手がけたことから具象画の制作も再開。ぐいぐいと迫ってくる自由奔放な風景画や人物画に、一般的な知名度も跳ねあがりました。

《作品G-135》制作年不明

当館では現在、剋太の作品を303点所蔵していますが、そのうちの293点(油彩画68点、グァッシュ225点)は作家ご自身から寄贈していただいた抽象画です。晩年、剋太は3か所に分けて多くの自作を寄贈しました。長野県の飯田市美術博物館へは書の作品を中心に459点、大阪府には主に『街道をゆく』の挿絵原画など2223点、そして埼玉には抽象画です。

このたびの展示では油彩画の抽象を中心に、初期の具象画も併せてご紹介します。また、「壁」のような大作に対し、小さなグァッシュの作品には意外なほど繊細な感覚を見出すことができるのも魅力です。形、色彩、線、マチエールは実にさまざまですが、そこに通底するひたむきでとらわれない、生(なま)の画境を味わっていただきたいと思います。(O.H.)


《作品B》1962年　第5回現代日本美術展